

悪霊 第三部・五月の紅い空

悪
霊

第
三
部
・
五
月
の
紅
い
空

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
佳代……………貧しい農家の娘
喜代美……………女工
小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
村野栄太郎……………党員。マルクス主義研究者
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭一郎……………満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
白瀬朱鷺……………女相場師。料亭「扇屋」の女将
鎌田悟……………党員。東京支部第四地区長
増田喬……………小百合の兄の後輩

昭和五年（一九三〇）年三月～五月。東京市、北海道H市

I

東京の春は、思ったより遅い……。
外套の襟をたてて家路を急ぎながら、猪俣佐和子は思った。

三月に入ってから十日が経つというのに、昨日は雪さえちらついていた。

午後六時を過ぎていた。いつものように茶封筒を抱えて印刷所に寄り、顔なじみの守衛に渡し、軽く言葉をかわして、佐和子は駅へと向かった。中央線に乗って神田に出て、山手線に乗り換え、日暮里で降りる。

駅前の商店街で、二人ぶんのお総菜を買い、いそいそと向かった先は、昨年暮れ、小沼健吾に誘われて参加した「研究会」で出会った、女工の貴代美のアパートだった。

初めて出会った夜から一週間後、佐和子は弥生町の下宿を引き払い、日暮里にある貴代美の部屋へ引っ越した。以来、ずっと同居生活が続いている。

貴代美は、女工の仕事の他に、週の半ばは女給としても働いている。曜日は決まっていない。

女給の仕事のない日は、佐和子より早くアパートに戻っている。アパートの建物が見えてくると、佐和子はまず、貴代美の部屋の窓を見る。あかりが点っている時は、自然と笑みが漏れてしまう。

だが、今週に入ってから、月曜日から木曜日まで、貴代美の帰りは遅かった。今日は金曜日。さすがに早く帰っているのではないかと期待したが、窓は暗いままだった。

…お店が忙しくて、手が足りないって言われてサ。ごめんよ。

貴代美はそう謝っていた。忙しいのは春先だからだろうか……。そんなことを考えながら階段

をのほり、鍵穴に合い鍵を挿し、ドアを開けて暗い部屋に入った。あかりを点け、米桶に残っていた冷や飯にみそ汁をかけ、買ってきたコロッケをおかず、侘びしい夕食を終えた。部屋にっている小さな台所の流しに食器を置き、ベッドに腰をおろす。

……あんたのこと、好きになっちゃったみたいだ。

貴代美と初めてかわした接吻が、忘れられない。貴代美の抱擁は、伊集院満枝に比べて、荒々しい。だが、そのふくよかな胸に顔を埋めると、満枝と抱き合っている時には感じなかった、安らいだ気持ちになれる。

満枝と貴代美を比べている自分に気づき、佐和子は独りで顔を赤らめた。

……満枝さんがいけないんだわ。全然、連絡をくださらないんだもの。

そう、口に出して呟いてみたが、いたたまれなさは消えなかった。

満枝の愛撫によって目覚めた肉体の悦びは、もはや封じ込めることができなかった。昨年十月に満枝と再会し、十二月に貴代美と出会うまで、独り、指でその箇所をまさぐり、慰めたことも一度や二度ではない。

自分は何を求めているのだろう。愛情？ それとも、淫らな行為？

考えれば考えるほど、答えは見いだせぬまま、己の醜さだけが浮かび上がり、責め立てられているような気持ちになる。

たかぶる気を鎮めようと、佐和子はかばんから一冊の本を取り出した。表紙に『日本に於ける資本主義発達の歴史』と題名が印刷されていた。勤めている雑誌社で借りたものだ。

作業机に置いてあった本を、佐和子が何げなく手にとって眺めていると、編集部員の一人が声

をかけてきた。

ああ、村野栄太郎の新刊ね。

その名を、佐和子は知らなかったが、まだ三十歳になったばかりの若手の学者だという。学生時代から社会運動に参加し、投獄されたこともある。いま、もつとも注目されている気鋭の論客の一人だよ、と編集部員は付け加えた。

興味があるのなら、持って帰って読みなまえ。そう言われるまま、かばんに収めた。

今年に入ってから、佐和子は二度、「研究会」に顔を出した。貴代美は、相変わらず居眠りしたり講師をからかっているばかりだったが、生真面目な佐和子は、参加する度に自分の勉強不足を痛感していた。

いろいろな本を読んでみよう、と考えていた矢先だったのだ。

「日本資本主義の急速なる発展を可能にしたものは、広汎にして深刻に強行せられたる農民の収奪に基づく膨大な資本の原始的蓄積であった。この蓄積は、一方、絶対専制国家の専制的権力の行使により、租税制度、公債制度、保護政策等々を楨杵として遂行せられ、他方、地主と高利貸と商人との破廉恥極まる謀求によって促進された」

「帝国主義ブルジョアジーと絶対勢力との国家機関を通してなされる農民および小市民の収奪が強烈であればあるほど、それだけ彼らの窮状は甚だしく、それだけ彼らを、地主に、高利貸に、商人に、中小産業資本家に従属せしめる」

よく理解できない単語も多かったが、勢いのある文章に引き込まれた。帝国臣民の大部分を占める農民の貧しい状況や、彼らを酷使し搾取して肥え太る「地主、高利貸、商人」の悪辣さが、

多くの数字を駆使して説かれている。

読み進むうちに、「すでに高まりつつある国内的諸対立は、さらに急速度に先鋭化するであろう」と書かれている箇所が目にとまった。

マルクスの『共産党宣言』には「現在、墮落し腐敗したブルジョアジーに対する、発展し組織化されたプロレタリアートのたたかいが、あらゆる社会で荒れ狂っている。それはやがて内乱となり、革命が勃発し、最終的にブルジョアジーの暴力的打倒へと到り、プロレタリアートの支配が始まるであろう」と書かれていた。

同じようなたたかいが、日本でも起こるのだろうか。それはやがて内乱となり、革命へとつながっていくのだろうか……。

不思議と不安は募らなかつた。むしろ、どこか心持が高揚していく。

「ただいま」

ドアが開き、入ってきた貴代美は、そのまま佐和子と並んでベッドに腰を下ろし、勢いよく仰向けに倒れた。

「ごめんねエー、今夜も遅くなっちゃって」

「いいのよ」

佐和子は首を振り、背を丸めて貴代美の顔を覗き込んだ。貴代美は腕を伸ばし、佐和子の肩を抱く。そのまま、接吻をかわした。貴代美の体温に、安らぎと切ないまでの悦びを覚えつつ、佐和子はふと、動きを止めた。

お酒の匂いがしない……。

貴代美は酒豪で、カフェに勤める夜は、たいてい、客のお相伴しよばんに預かり、赤い顔で帰ってくるのが常だった。

佐和子の不審そうな面持ちに、貴代美はからだを起こし、ほつれた髪を撫でつけた。

「今夜は、カフェじゃなかつたんだ」

「工場が忙しかったの？」

「ううん」

貴代美は俯うつむき、しばらく考え込んでいたが、やがて意を決したように口を開いた。

「あたい、組合に入ったんだ」

「組合……？」

「うん。さっきまで、その会合があつてサ」

この時代、労働組合じたいは非合法ではない。だが、貴代美の言う「組合」は、非合法組織である「党」との結びつきが強く、当局から厳しく監視されている団体だった。

「党」じたいは、団体としてさほど大きくはない。「黨員」もせいぜい二三百人だ。「党」を動かしているのは、「党中央」と呼ばれる数名の幹部だが、これでは大きな活動はできない。その実働部隊となるのが、全国数万人の労働者が所属する「組合」である。末端の「黨員」は、「党中央」の指令を受け、「組合」の窓口伝える。「組合」での活動が認められ、「黨員」に選ばれることもある。

単純に言えば、「組合」に入ることは、準「黨員」として、非合法活動に協力するということを意味する。

佐和子は、そのあたりの事情に詳しいわけではない。だが、「党」が工場に派遣した「細胞」らしき男が、既存の労働組合を「資本家の御用団体」と罵倒し、自分たちの「組合」に入ってもにたかおうと、しきりに勧誘してくることは、貴代美自身から聞いていた。

「ただ、あの「組合」って危ないからなア、イヤだって言い続けているのに、しつこいんだよ。貴代美は笑ってそう言っていたはずだ。」

息を呑んで見つめる佐和子に、貴代美は真顔を崩さずに言った。

「あたいね……バカだし、研究会で教わることもよくわかんないんだけど、でもね、小沼さんにああまで熱心に誘われちゃうと断りきれなくなってしまう……」

「小沼さん？」

伊集院満枝が「あなたを守ってくれる人」として紹介された小沼健吾のことだった。研究会には、必ず顔を出しているが、いつも玄関で静かに座っているだけで、佐和子とも、貴代美ら女工たちとも、言葉を交わすことすら少ない。

小沼は、貴代美の工場で働いている労働者ではないと聞いていた。ふだんはどんなことをしているのか、果たして「黨員」なのかどうか、貴代美は知らないし、満枝も教えてくれなかった。

その小沼が、熱心に貴代美を「組合」に入るよう説得したという。

何時の間に、そんな……。

なぜか、不快な思いがこみ上げてきた。それを察したのか、貴代美は悲しげな顔で手を振った。「ごめん、ごめん。話さなかったのは、口止めされてたから。ほんとうは、組合に入ったことも言っちゃいけないって言われてるんだ。でも……」

でも……？ 瞬きもせず見つめる佐和子に、貴代美は、眼を伏せて言った。

「お、さわちゃんには、隠し事はできねエから……」

佐和子の眼から、涙がこぼれおちた。

「ごめんなさい……別に、内緒にされていたことが嫌だというわけじゃないの。ただ、最近お帰りが遅かったから……」

鼻をすすりながら言い募る佐和子を、貴代美は抱きしめた。暖かく、ふくよかな貴代美のからだに、佐和子は涙をおさめ、笑顔で言った。

「わたくしも、何か、お力になりたいわ？」

「お力って……あたいのために？」

「ええ」

「そりゃ、だめだよ」

貴代美は首を振った。

「だって危ないんだよ。大地震の時、どさくさに紛れて殺された組合員だっているんだから」

七年前の関東大震災のことである。死者十万人を数えた未曾有の震災で秩序が混乱するなか、当局が恐れたのは社会主義革命の勃発であった。数千人の朝鮮人が虐殺されたのは、彼らの背後で海外の社会主義国が糸を引いているというデマを当局が信じたことが大きかった。さらに、無政府主義者の大杉栄が憲兵隊に拘引され、殺された。

官憲の手は労働組合にも及んだ。多くの組合活動家が保護という名目で拘置されるなか、亀戸警察署で九人の活動家が殺された。裸にして首を切り落とすという残酷なやり方であったという。

「おさわちゃんみたいなお嬢さんに、助けてもらうなんて、できないよ」
「平気だわ」

佐和子は、貴代美の手を握りしめて言った。

「わたくし、何も知らなかったの。農民や、工場で働く労働者が、どれだけ悲惨な状況で、地主や資本家に搾られていたのか、全然知らなかった。でも、今は違うわ。わたくし、研究会であなたと出会ってから、結構勉強したの。中産階級が没落して、資本家とプロレタリアートの対立が迫っている今、あなたたちとともに、たたかいたい」

熱弁を振るう佐和子を、貴代美はあつげにとられて見つめていた。

「あのお嬢さんが？」

小沼健吾は、怪訝な顔で「細胞」の報告を聞いた。

日暮里から駅ひとつ離れた田端の煙草屋の前に、「細胞」は待機していた。一日に一度は、街頭で落ち合い、小沼は「党」の方針を伝え、「細胞」は工場での様子を知らせる。場所や時間は、その都度変える。これが「街頭連絡」と呼ばれる「党」の連絡方法であった。

まず煙草を買い、近くの電信柱にもたれるようにして立っている「細胞」に、マッチを借りる。後は、短く世間話をするふうを装いながら、報告を交わしあうのだ。

「党中央」は、二ヶ月後の五月一日、すなわち、国際的に労働者が示威活動を行う日であるメーデーに向けて、ある計画を立て「組合員」を大量動員するよう指令を発していた。その計画内容を聞いた時、小沼は愕然となった。

できるはずがない……。

現在の「党中央」は、卒業間もない帝国大学出のインテリ青年たちで構成されている。非合法活動歴が少なく、しかも現在は当局の眼を逃れて各地を転々としているだけに、現実離れた指令が多くなった。今回の「計画」など、その最たるものというしかない。

しかしながら、非合法活動に従事する者にとって「党中央」の指令は絶対だった。異議を唱えることは許されない。やるしかない。

まずは、「組合員」の数を増やすことが先決だった。そのためには、工場での人望の厚い工具を引き入れねばならない。その工具を投網にして、多くの工具を引き取り込むのだ。目星をつけたいうちの一人が、女工たちの姉御的存在である貴代美だった。

「細胞」が伝えてきたのは、貴代美が「組合」への加入を承諾したことだった。朗報であった。「ただ……条件がある、と」

その「条件」を聞いて、小沼は逡巡した。

伊集院満枝が小沼に「託した」猪俣佐和子が、貴代美と同居していることは、小沼の耳にも入っていた。その佐和子をも「組合」に加入させろ、というのだ。

雑誌社に勤める佐和子はインテリの部類に入る。「組合」は本来、ブルーカラー労働者によって構成されるべきで、佐和子は「組合員」としてふさわしいとは言えない。もし、非合法活動に従事するとすれば、学生が主体の「青年同盟」という別組織があるが、この組織に加わるためには、どれだけ社会主義の理論を修得しているかが問われる。一度や二度、研究会に出た程度で、あのプライドの高い小僧どもが迎え入れてくれるかどうか。

とはいえ、迷っている暇はあるまい、と小沼は思った。まずは貴代美を「組合」に加入させ、二ヶ月足らず先に迫ったメーデーに向け、人を集めることが最優先されるべきだ。

「貴代美には、了解したと伝えてくれ。ただし……」

小沼は「細胞」に告げた。

「そのお嬢さんに会ってから正式に決めたい。日時は追って連絡すると伝えてくれ」

以上だ、と付け加え、煙を吐き出した。「細胞」は軽く頷き、それから二人は、いかにも世間話を終えたように、お辞儀をかわして別れた。

さて……。

小沼は歩き出した。次の街頭連絡の場所に行かねばならない。

電車に乗って向かった先は、池袋駅前の喫茶店だった。会う相手は、鎌田悟かまたまさとという名を使っている「黨員」である。東京支部第四地区長という大仰な肩書きだったが、大学を出たばかりの若造にすぎない。度重なる検挙で、数多くの古参「黨員」が獄に放り込まれた。現場を知らない若造が、社会主義理論に詳しいというだけで、重要な役職につくようになっていたのだ。

喫茶店に入ると、鎌田は、奥のほうのテーブルで新聞を読んでいた。小沼の姿を見ると、新聞を置き、眼鏡のつるに手をかけて位置を調整した。

「どうかね」

小沼が向かい合って座るなり、訊ねてきた。「組合員」の動員状況のことである。

「はかばかしくありませんね」

小沼は、寄ってきた給仕にコーヒーを注文し、煙草に火を点けた。

「状況は改善しておらんのかね」

鎌田は、顔を顰しかめて言った。小沼は答えた。

「努力はしていますが……なにぶん、二月のこと、がありましたね」

二月のこととは、先月の下旬に行われた総選挙での街頭活動である。「党中央」からの指令は、投票日までの一週間、全国で一斉にピラをまけ、というものだった。これまでの選挙では、「黨員」であることを隠した候補者を立ててきたが、票が集まらなかった。そこで、今回は候補者は立てず、街頭でピラをまいて、「党」の存在を宣伝することとなった。

ピラまき隊を組織せよ、という指令が小沼にも下った。小沼は青くなった。当時、街頭でピラをまけば即座に逮捕される。ピラは、労働者が集まりそうな場所にこっそり置いておくというのがこれまでの戦術だった。それを今回は、白昼堂々やれ、というのである。

警官に見つかったらどうするんです？ と訊ねると、返ってきた答えは、「逃げる」だった。念のため各自で武装し、身辺を整理せよ、逃走資金は用意する……。

結果は悲惨だった。百数十名が動員され、大部分がその場で逮捕された。以後、「組合」は、「党」の方針に疑問を抱くようになっていた。

「党中央」が五月一日のメーデーで実行しようとしている「行動」には、どう見積もっても千人単位の人間が必要になる。現在、小沼が担当している地区の「組合員」を総動員しても、せいぜい百人。そのうち何人集まるか、おぼつかない。

ほとんどの「組合員」が望んでいるのは生活の改善である。自分の生活を壊してまで、「党」

の活動に身を捧げてくれる者は少ない。

遠回しにそのことを告げると、鎌田は、鼻を鳴らして言った。

「革命のためだ。多少の犠牲はやむを得ない」

馬鹿な……。小沼は俯いた。これだから、苦勞知らずの学生は困る。家族を養わねばならない身にもなってみろ。そう大声で言えれば、どれだけ楽だろう。

「君は、先月も中央の方針に異議を唱えていたね」

鎌田は、不機嫌そうに身を乗り出した。

「これ以上、文句を言うようだと、僕としても中央に報告しなければならなくなる。いいのかね」

……「中央」と言えば、おそれいってひれ伏すでも思っていやがる。それなりに社会運動の活動歴の長い小沼であった。年下の、学歴を鼻にかける若造に、居丈高に威嚇されるのは、屈辱だった。

「まあいい。次の指令を伝える」

鎌田は声をひそめた。

「当日の決行場所が、ほぼ決まった。君の受け持ちは、京橋だ。京橋に、百人の行動隊を待機させられるアジトを確保しておいてくれたまえ」

そう言っ、かばんから取り出した茶封筒をテーブルに置き、次の連絡場所と日時を告げて立ち上がった。

去っていく鎌田の背を一瞥して、茶封筒の中身をあらためた。しわくちゃの紙幣が入っている。

京橋といえば、東京駅や銀座にも近い繁華街だ。そこに、百人を待機させられる場所を確保せよという。

これきりの金で、無茶だ……。

小沼は溜息をつくしかなかった。

翌日の夕暮れ前。

荒川の河川敷で、小沼健吾は猪俣佐和子と会った。

桜にはまだ早く、人出は少ない。ゴム長をはいて川漁をする者、石を投げて遊ぶ子どもたちが目につく程度だった。

佐和子は、春らしい白地に花柄の和服に日傘といういでたちで、河原に腰をおろしていた。その隣に、小沼がしゃがんで煙草を吹かしている。

「単刀直入に言いますよ」

小沼は、日差しを浴びて光る川面を見つめながら言った。

「組合への加入は、無理です」

佐和子の面差しが歪んだ。眼を悲しげに見開き、小沼を凝視している。

「組合は、ブルウ・カラアの団体です。あなたのようなホワイト・カラアは、組合員として、まず認められないでしょう」

「あの……」

佐和子がおおずと口を開いた。

「正式な組合員になれなくても、結構です。ただ、わたくしは、貴代美さんのお力になればと、それだけで……」

「組合員としてではなく、活動に参加すると言われるのでしたら……」

小沼は、佐和子を「さへぎ」隠した。

「その場合、あなたがどこで、どんな仕事をするかは、上がが決めます」

「……………」

「すぐに引越して、見知らぬ男と同居することになるかもしれない。それでも平気ですか？」

佐和子は、反射的に淡路町にある小沼の「家」に住んでいる、十六歳くらいの娘を思い浮かべた。佳代かよというその娘は、小沼とは血のつながりはないが、妹ということになっている。男の独り暮らしは周囲の詮索を招きやすい。それを防ぐためのカモフラージュであるらしいことは、佐和子にも察しがついた。

「留守番をせよ、ということですか？」

佐和子は俯いて言った。

「淡路町のお宅の、あの娘さんみたいに」

「言っておきますが」

小沼は静かに釘を差した。

「あの娘は、妹です。男女の仲じゃあない」

男女の仲、という言葉がかえって生々しかった。小沼は続けた。

「ただし、同居する相手と、そういう仲になることは、特に禁じられてはいません」

そう言うと、小沼は佐和子の顔を覗き込んだ。佐和子は、硬い面もちで、口をくち嚙くちんでいる。小沼は、佐和子から眼差しを逸らして言った。

「活動に、私情を挟むことは許されません。目的のためならば、非情に徹せねばなりません」

煙草を捨てて立ち上がり、返事は貴代美に言ってください、と付け加え、佐和子に背を向けた。

「あの……………」

佐和子が口を開いた。歩き出そうとしていた小沼は、足を停めて振り向いた。佐和子が、堅い面差しのまま、小沼を見上げていた。

「どうしても…………その、貴代美さんと一緒に、というわけにはいかないのでしょうか？」

言葉の端がわずかに震えていた。その瞳が揺れていた。それをどうとらえていいか分からず、小沼は佐和子を見つめた。

「我儘わがままだとは存じております。でも、わたくし、どうしても…………」

「お嬢さん」

小沼は言った。

「あなたは、貴代美と同居なすっているんでしょう。貴代美のためにおっしゃるのなら、今のままでも十分です。貴代美も、あなたが炊事や洗濯、掃除をしてくれているから、ずいぶん楽になったと言っていましたからね」

「それだけですか？」

「はい？」

佐和子の声音が固く強張った。その瞳の揺れが消え、まっすぐに小沼を射抜くように見ていた。

「要するに……主婦に徹していればいい、と」

小沼はたじろいだ。高等女子校を出た佐和子が、尋常小学校しか出ていない女工の貴代美の「主婦」をやっているというのは、確かに奇妙な図式であろう。

佐和子はさらに言った。

「活動に参加したければ、わたくしが存じ上げないどなたかの主婦役をやれと、そうおっしゃるのですね」

「いや……」

小沼はたじろぎつつ言った。

「それを決めるのは、あたしじゃない。あたし自身の事だって、あたしの一存じゃどうにもならないことのほうが多いんだ」

「存じません」

佐和子は日傘を畳んで立ち上がり、小沼に詰め寄った。噛みしめた唇が小刻みに震えている。怯えや悲しみではない。そこに浮かんでいたのは怒りだった。

「よろしゅうございます。わたくしは、わたくしなりに、やり方を見つけます」

次の瞬間、小沼は激しい痛みを股間に覚えた。佐和子の日傘の取っ手が、睾丸を直撃していた。小沼はしゃがみこんだ。右手でからだを支え、左手で股間を抑えた。こみあげる嘔吐と、灼けるような痛みに、身動きできなかつた。

ご面倒さまでした……。

佐和子は頭を下げ、河原から去っていった。

伊集院満枝といい、猪俣佐和子といい……。

痛みが和らいだのは十数分後だった。なんとか、からだを起こして河原に座った。

小作争議に携わっていた頃から、暴力を振るわれることには慣れている。だが、女から急所を蹴られる苦しみは、また別のものだ。内臓をかきむしられるような激痛もさることながら、やり場のない屈辱感に苛まれ、男としての自信をへし折られたような気持ちになる。

確かに、「党」の女性に対する扱いは、封建的な男尊女卑そのものだ。社会主義にかぶれ、「党」の活動に参加している良家の子女は少なくない。だが、「党」が彼女らに期待しているのは、実家から持ち出してくる金品と、男性「党員」の、あからさまに言えば、欲望のはけ口としての役割なのだ。

おかしなものだな……。

時として、小沼は思う。

こんにちの社会で、階級差を産んでいるのは学歴の有無だ。環境恵まれ高等教育を修めた者が高い地位に就く一方、学歴のない者は下層社会に甘んじるほかはない。この点では、世間も「党」も変わらない。女性の地位の低さに関しては、世間のほうがましなのではないか。お偉方のことは知らない。貧しい長屋では、いわゆる嫡天下が少なくない。

やっと歩けるまでに立ち直ったのは一時間後だった。痛みの残る睾丸を庇いつつ、内股で歩くのは辛かった。淡路町の家に戻った時は、すでに夜更けだった。

格子戸を静かに開ける。いつもは、まず戸を叩いて佳代を呼び、内部に異常がないかを確認し

てから入るのだが、今夜は、顔を合わせるの嫌だった。股間の痛みはなかなか引かず、がに股歩きを余儀なくされている状態だったからである。

玄関を上がると、佳代の三畳間の襖が開いて、明かりが漏れていた。何気なく覗くと、佳代はちゃぶ台に顔を伏せて、居眠りしている。

佳代には、非合法活動に従事していることは知らせていない。飲み込みのよい娘で、ハウスキーパーとしてやらねばならぬこと、してはならないことは十分に心得ている。小沼が、日中何をしているのか、なぜ、時折人がやってくるのか、疑いを持つふうもないし、訊ねても来ない。無口だが、微笑を絶やさず、瞳は常に澄んでいる。

ちゃぶ台に本が広げてあった。手にとって表紙を見ると、マルクスの『資本論』だった。貴代美に貸していたが、一行も分かんねえ、と返しに来たので、しまっておくようにと佳代に命じた本であった。

小沼は、奇妙な不快感を覚えた。

……佳代は、こんなものを読むべきではない。

なぜかは分からないが、社会主義の書物を読むことで、佳代が汚れていくような気がしたのだ。

II

「ああ、君」

編集部員から呼び止められ、佐和子は「はい」と返事をして、彼のデスクの傍らに立った。

「今から村野先生のお宅に行くんだが、君も来るかね？」

「え？」

「ほら、君、とても面白いと言ってたじゃないか」

ああ……。佐和子は得心した。編集部員から借りた村野栄太郎著『日本に於ける資本主義発達の歴史』を返却したのは二日前だった。本を受け取った編集部員には、今、村野さんに原稿を依頼しているんだ、と言われ、それはとても楽しみです、と答えておいた。

「編集長から、君にもそろそろ編集の仕事覚えさせるように、と言われていてね。もし村野さんが君のことを気に入るようだったら、担当にしてもいい」

「ほんとうですか？」

佐和子は眼を輝かせた。

貴代美は、「組合」の活動が忙しいらしく、早く帰ってくることは、ほぼなくなった。佐和子自身が「組合」加入を望んだが、小沼に拒絶された。沈みがちだった佐和子は、編集部員の言葉に救われる思いだった。

村野の下宿は、神奈川県くまがたの鶴沼にある。東京駅から国鉄で鎌倉駅まで行き、さらに江ノ島電鉄に乗り換えねばならない。

「お会いする前に言っておくがね」

二両編成の江ノ電で、ポールが架線をこする音の響きながら、編集部員は言った。

「村野さんは、おからだ弱くてね。だから暖かい鶴沼で療養されているんだ。それと、幼い頃関節炎を患い、手術で左足を切断したんだとさ」

「左足を……?」

「そう。だから、間違っても左足をじろじろ見たり、失礼な真似をしちゃいけないよ」

駅を降り、海岸へと歩き、松林を抜けると農家があった。村野は、そのの一室に間借りしているという。

「先生、いらっしゃいますか?」

庭先で農具の手入れをしていた老人に声をかけると、「いますよ」と離れを指さした。

離れの戸を開けると、六畳一間だった。埃の匂いが鼻をつく。

「やあ、どうぞ」

布団に仰臥していた男が、むくりと身を起こした。長く伸びた髪を真ん中で分け、分厚い眼鏡をかけている。着ているどてらは皺だらけで、顔色は青ざめ、肌は荒れている。

これが村野栄太郎……。佐和子は息を呑んだ。気鋭の学者というよりも、長期療養中の病人のようだ。

村野は、どてらの胸元を掻きあわせ、敷き布団の上に座った。掛け布団が膝を覆っている。初対面の客に、左脚がないのを見せたくないのだろう。

「村野先生、初めまして」

編集部員は靴を脱いで部屋に上がり、ふかぶかと一礼し、外で立ったまま逡巡している佐和子に、君もおあがんなさい、と声をかけた。

はい、と答えて頭を下げ、部屋に上がった。座布団はない。畳はささくれだっていた。

「女の編集者とは、珍しいね」

村野は、布団の傍らの小さな文机に乗せてあった茶をすすった。か細い、生気のない声だった。「ええ。今年から入社したんですが、よくやってきています。村野先生のご本を読んで感激したというので、連れてきました」

「先日……」

村野は、顎の無精ひげを撫でながら言った。

「婦人雑誌から原稿を頼まれてね」

「ははあ」

「一応、書いて送ったんだが、内容が雑誌にふさわしくないとかで、送り返されてきた。革命とか、危機といった言葉はなるだけ使わないでくれと言うんだ」

当時の書籍や雑誌は、当局の検閲を通らないと発表できなかつた。過激な言葉遣いは、伏せ字の処理を施される。「ソビエトの十月革命において資本家地主政府を倒してプロレタリア独裁を実現し」という文章は、「ソビエトの十月××において××××××××××としてプロレタリア×××××を実現し」というふうに印刷されるのだ。

「誌面に伏せ字の入ったページを作りたくないということみたいだね」

「婦人雑誌はそうかもしれませんな。うちは大丈夫です。いくら伏せ字をしても、読者はたいてい、何を書いているか推察できるものですから」

「伏せ字になった部分も、原稿料はいただけるんだろうね」

「そりゃあ、もちろんです」

さして面白くもない冗談に、編集部員は追従笑いで答えた。村野はふと、佐和子を一瞥し、

机の引き出しから原稿用紙の束を取り出した。

「これが、その女性雑誌で拒否された原稿なんだが、君、読んでみるかね」

「え？」

不意に声をかけられ、佐和子は当惑した。村野はその眼差しを、佐和子から床の畳へと逸らし続けた。

「若い婦人読者向けに書いたつもりだが、ひとつ、感想を聞かせてほしい」

そっと隣の編集部員を窺った。編集部員は、ただいとおきなさい、と目配せした。

「では、読ませていただきます」

受け取るために膝を進めると、村野は俯いたまま原稿用紙を差し出した。受け取る際、村野のざらついた指が、佐和子の手に触れた。その一瞬、村野の頬がびくりと動いたような気がした。

原稿は、二週間以内に書き上げます。電報を送るから取りに来てください。しばし雑談をした後、村野はそう言い、佐和子と編集部員は立ち上がって家を辞した。

アパートに帰ると、いつものように貴代美は不在だった。

冷えたご飯に朝食の残りの味噌汁をかけてかきこむ。腹は満たされたが、ひどくやるせなかつた。佐和子は、村野から預かった原稿をテーブルに広げて読み始めた。

……資本主義体制に対する社会主義体制の優位が、今日ほど明瞭になったことはない。

明解な論旨、畳みかけるような語り口は、鶴沼の農家の離れにいた、無精ひげの病人とは思えぬ力強さがあった。佐和子は、しだいに引き込まれていった。

不況が続いている。街には失業者が、農村に娘の身売りと欠食児童が溢れている状況はいっこうに改善される気配を見せない。日本だけでなく、世界の資本主義諸国が経済的に苦しんでいるのだ。

……一方で、ソビエト同盟には一人の失業者もいないばかりか、かえって労働者の不足を訴えているほどだ。

……農村について見ても、ソビエト同盟においては、貧農ばかりでなく中農の決定的多数もまた共同経営に参加し、勤労農民の経済的、社会的な生活水準は著しく向上した。

当時のソビエト社会主義共和国連邦において、スターリンが集団農業化政策を押し進める過程で、反対勢力を弾圧し、百万に近い人々が処刑されていたことは、伝えられていない。村野は、資本主義国の凋落と社会主義国の発展は歴史の必然であったとし、さらに、女性の地位向上に触れる。

そもそも、一九一七年の社会主義革命において女性の果たした役割は大きかった。勤労婦人たちは、革命戦争の際、炊事や看護などの後方活動をこなしただけでなく、第一線に立って戦った。革命後、男女差別は撤廃された。そしていまや、男子とまったく同一の政治的、社会的ならびに経済的権利を享有して社会主義建設の歴史的事業に積極的に協力し、男子と肩を並べて非常な熱意を創意とを発揮している……。

「ただいま！」

読み終えたところで、貴代美が帰ってきた。佐和子は立ち上がり、玄関まで出迎える。貴代美は、その大柄なからだを投げ出すように佐和子に抱きついた。小柄な佐和子は、重い、重いわよ、

と笑った。続いて、接吻。

「あら」

からだを離れた貴代美は、テーブルに広げられた原稿用紙に目をやり、偉いなア、またお勉強なんだ、と一枚一枚めくった。

「やっぱり、ダメだア！」

眠くなっちゃうよ、とふざけながら、ベッドに仰向けに寝転がる。その傍らに、佐和子はそつと腰を下ろした。

「ねエ」

貴代美は甘えるように言った。

「今夜、したい」

佐和子は小さくうなずいた。貴代美は嬉しげに右手を伸ばし、佐和子の頬に掌をあてた。工場の労働でひび割れ、堅くなった掌。その甲に、佐和子は自分の掌をあてがった。

「おさわちゃんの手って……」

貴代美は言った。

「え？」

「やわらかいね」

「そう……？」

「やっぱり、育ちのいい、お嬢さんの手だ」

「嫌」

佐和子は貴代美の手をはねのけた。驚いて身を起こす貴代美から、顔を背けた。

「お嬢さんという言われ方、きらいよ」

「ごめんよ」

いつになく強硬な口振りと態度に、貴代美はおろおろした。

「褒めたつもりなだけで……」

「でも嫌。なんだか、わたくしのこと……同じ仲間じゃないと言われてるみたいで……」

「そんなつもりじゃなかったンだつてば！」

貴代美は、佐和子の手を掴んだ。

「ごめんね、あたい、バカだから、つい、変なこと言っちゃうの。あたい、あんたは仲間だと思ってる。大事な大事な仲間だつて思ってる」

必死で言い募る貴代美に、佐和子は、心のどこかがゆっくりと冷えていくのを感じていた。同時に、得体の知れぬ悦びがこみあげてきた。

「あたい、おさわちゃんの手が好き。やわらかくて、あったかくて、大好き。そう言いたかっただけなんだ。ほんとうだよ」

「いいのよ……」

佐和子はようやく貴代美に顔を向け、その唇に人さし指を当てた。

「わたくしも、貴代美ちゃんが、大好き」

佐和子の小柄なからだだが、大柄な貴代美に覆い被さった。貴代美は、導かれるように仰向けになった。佐和子の手が、貴代美の裾から中へと滑り入った。あ……。ふとももから陰部へと撫で

あげられ、貴代美が小さく呻いた。

ゆっくりと陰唇を押し開き、十分にしめり気を帯びるのを待って、指を沈める。貴代美は大きくのけぞり、吐息をついた。さらに敏感な部分をまさぐる。貴代美は眼を閉じ、首を左右に振り、こみあげる快楽を抑えかねるようになり打ち震えている。

その姿を見下ろしながら、佐和子はふと思った。字も読めない、無教養な女工。そんな貴代美が「組合」に招き入れられ、自分はこのけもの、にされている……。

おさわちゃん！ 貴代美はそう叫んでしがみついていた。烈しい抱擁を受けながら、彼女に対して妬みとも蔑みともつかない感情を抱いてしまった自分自身を、佐和子は恥じた。